



小豆島八十八ヶ所霊場巡拝



平成12年8月
第33号

発集発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-4
真言宗 正観寺
小出真行

小豆島巡拝

小豆島は瀬戸内海では淡路島に次いで二番目に大きい島です。この島はオリブの島としても有名で、大学時代一度観光で来たことがあります。

例年ですと、小豆島巡拝は三月下旬か四月上旬でしたので、保育園の卒園・入園時期と重なり思うにまかせませんでした。日程を繰り下げることにより参拝することができました。

なんとこの小さな島に大小、八十八ヶ所の霊場があり、なかでも木造の立派な寺院があるのには驚き、まさに人々の祈念と修練の島であることを再認識しました。

見る人の程度に依って、ものは大きく
小さく、或は深くも浅くもなる。

(十住心論)

「坂東三十三観音霊場巡礼」

五月十五日、午後八時に広島を出発した。後期「坂東三十三観音霊場巡拝」は、途中何回か休憩をとりながら鎌倉へ、夜明けとともに、ポツカリ浮かんだ富士のお山が朝日に映え雄大な姿で出迎えてくれました。

茅葺きの鎌倉最古の寺、第一番杉本寺、ツツジの名所としても知られています。

奈良の大仏とよく比較されます。

鎌倉の大仏で昼食。

深山幽谷の趣が漂う、第二番岩殿寺

木像彫刻として日本最大(九・一八m)の十一面観

世音菩薩が安置されています第四番長谷寺

行基作「鈍彫り」の十一面観音を祀る第十四番弘明

寺、雷門で有名な第十三番浅草寺を参拝し、仲見世も見学。その晩、東京の大学に通っています長男と四十日ぶりに再会し、美味いお酒を飲みました。

第二日目

浅草を出発し、桜・ポタンの名所第二十九番千葉寺、高床式の大堂第三十番高蔵寺、そして今回の巡拝で深く感銘をうけた第三十一番笠森寺は、三十mもの高さにそびえる大悲閣と呼ばれる観音堂、全国で唯一の四方懸造で、山上の岩の上に木を組みあげたその姿は、寺というよりも、空に向かってそびえる楼閣の様でし



鎌倉大仏

た。お堂に入ると、前立の十一面観音像の手からつながられています「御縁の綱」と呼ばれる綱には、布やハンカチが幾重にも結ばれここを訪れた者が観音さまとご縁を願ったものなのでしよう。ここでは本当に運がよく、私達がお参りをすませると同時に雨のため閉門しました。

閑静なたたずまいの古刹、三十二番清水寺。

日本百景のひとつとされる鐘ヶ浦を望む結願寺、第三十三番那古寺を参拝し本日の宿、ホテル三日月に到着。大変豪華なホテルでピククリ。



三十二番清水寺

第三日目
ひたすら九十九里浜を走り、犬吠埼より番外のじゅんれいのてら満願寺(四国八十八ヶ所のお砂踏みで堂内を巡る)

観音像が海から引き上げられたとき、天から米が降ったことから「飯沼」と称します第二十七番円福寺、仁王門にかけられたしめ縄は「大伏の仁王」と呼ばれています第二十八番龍正院をお参りし、本日の宿潮来ホテルに予定時刻より早く到着しましたので「潮来花嫁

さん」の唄でおなじみの潮来十二橋めぐりの舟に乗りました。

第四日目

潮来を出発し、成田山新勝寺で昼食、さすがに川崎大師と並んで初詣で賑わう諸祈願の寺らしく見事な造りでした。

古木に覆われた第二十六番清滝寺、古刹で花の名所としても知られ、「関東の吉野」と呼ばれる第二十四番楽法寺、高さ3mほどの漆黒の千手観音像を直接拝めます、第二十五番大御堂を最後に、坂東三十三観音霊場を無事成満しました。

第五日目

筑波山を出発し、東京湾アクアラインを通り「海はたる」に停車。ここで「ウミホテル」という生き物を見ましたが、名前のとおり、海中で神秘的な光を放つ海のホテルです。海面をチカチカ光りながら漂うヤコウチュウの仲間とっていましたが、ミジンコ類のことで全くちがう生物のようです。

横浜ベイブリッジ、横浜マリントワーを経て一路広島へ……。筑波山を出

発し、十五時間の行程でのバスも無事広島に到着しました。二年にわたる霊場巡拝も満願したこともあり、どの顔も安堵と満足感で一杯の様でした。翌朝、参拝者全員元気で帰広しましたことを本尊さまにご報告し、心地よい眠りにつきました。



ぼっくりいく人 いけぬ人

これは四国三十三観音霊場会主催の講演会でのお話
しです。

講師の早川一光先生は、京都西陣で永く老人医療に
深い関りがありました。毎年、ポックリ寺にお参りに
行く老人会の旅の付き添いを頼まれたそうです。ポッ
クリ死にたい人の旅にどうして医者がついていかなけ
ればならないのでしょうか？ 途中でそのままポック
リいけば本望なのに……………。

そこで、先生は隣りに座ったお婆ちゃんに聞いたの
です。

「お婆ちゃん、そんなにポックリ死にたいの？」

「死にとうおす。」

「どうして？」

「うちの嫁の世話には金輪際なりとうおへん。」

「そうか。そんなら、このバスが今、木津川を渡つ
ているから、橋からバスが落ちれば、皆簡単にポック
リいけるが、どうや？」

するとお婆さんの顔色がサツと変わり、

「そんな殺生なこと言わんといて」

「殺生なんて、あんたポックリ死にたいって拌みに
行く人と違うんか？」

と言うと、お婆ちゃんは暫くだまって考えて、

「それはそれ、これはこれ」……………。

ある老人会が、ポックリ寺にお参りに行ったところ、
帰ってきたら、もう二度とあそこには行かないとのこ
と……………。何故かというとお参りに行って帰ってきた
三日後に、そのうちの一人がポックリ亡くなられたと
のことです。すると、皆が何と言ったと思います？…

……………。あそこは、ご利益がありすぎるから行きたくな
いね。ですって……………。

一体生きたいのか死にたいのかどっちなんでしょう
ね。私達の本音は、いくらポックリいきたいといつて
もそれは、今日明日のことではなく、ずっと先の話、
その時どうしても死ぬなら、その時はポックリいきた
いという、まことに自分に都合のよい願いですね。

ある人が十五年も病で床にふせ、何度となく生死を
さまよいました。でも、「今度だけは助からないだろ
う」と宣告を受けたのです。すると、家族の者は「今
までも、何度も乗り越えたので、今度も何とか助けて
ほしい、たとえ、一日、一時間、一分、一秒でも…………。」
と懇願するのです。「もう少し、生かさせてほしい！」
と残った者に思わせる生き方が本当のぼっくりいける
人なのだと力説されていましたが、本当にそうですね。
惜しまれる死…………。これこそが尊いのでしょうか。あな
たは、どうですか？…………。

なお、それには次の条件があるそうです。

一、ガンの告知 どうするか文章にし、本人署名
捺印

二、延命治療 どうするか文章にし、本人署名
捺印

三、どこで死ぬか 家族の署名捺印
いずれお世話になる素直な人間
性が必要

四、かかりつけの医者 夜中でも往診してくれる
医者だけでは死に対する苦し
みは取れない。

五、かかりつけの寺 心にきく薬／不安を取り除く
右手／坊主

六、どんな葬式にするか 左手／医者
できるだけ生前にテープに
取っておく

七、財産を残すな 財産の方針
使い切れなかったら医療関係
寺に寄付せよ

とのことです。いかがでしょうか？

「大安？」 「仏滅？」

「結婚式はなぜ大安の日にするのか。なぜ仏滅の日
にしないのか。お葬式はなぜ友引の日にしらないのか。
誰か教えてもらいたい」といいますと、たいいていの人は

「それは迷信だよ。だけど、みんながいけないとい
うから、やらない方がいいのだろう」と答えます。

迷信というのは、道理にかなっていないことを信ず
ることです。信心というのは、天地自然の法則にもと
づいている道理を信ずることです。

そこで、大安仏滅の、「六曜」について説明しまし
う。

六曜には、仏滅、大安などと書いてありますが、ど
こからはじまるのか分からないでしょう。それは、き
ちんと決まっているのです。

もともと六曜というのは、中国の名将であった諸葛
孔明の軍隊を使っていた日時のことと、これを「諸葛
孔明六壬時課」といいました。それを後年、日々の吉
凶を占うのに転用するようになったのです。
その順序は、一、先勝、二、友引、三、先負、四、

仏滅、五、大安、六、赤口と運行します。各月に対しては、

旧暦一月一日と七月一日は 先勝の日

旧暦二月一日と八月一日は 友引の日

旧暦三月一日と九月一日は 先負の日

旧暦四月一日と十月一日は 仏滅の日

旧暦五月一日と十一月一日は 大安の日

旧暦六月一日と十二月一日は 赤口の日

と決めてあり、一ヶ月のはばで順ぐりに回ってゆくのです。

先勝とは一釈迦が菩提樹の下で悟りを開いた日（十月八日の明け方）

友引とは一釈迦のお葬式の日（二月十九日）

先負とは一釈迦がお城を出た日（十二月十日）

仏滅とは一釈迦が亡くなった日（二月十五日）

大安とは一釈迦の誕生日（四月八日）

赤口とは一釈迦を大葬した日（二月十七日）

ここまで書けば、六曜が仏教といかに縁が深いかが、お分かりになったでしょう。

しかし、現在の六曜は、お釈迦さまの誕生とか成道、あるいはその他の日付との関係はないようです。

曜とは、光のかがやきの意味ですが暦の上では惑星のことを指します。

日本では、明治六年から太陽暦が使われていますが、それまでは推古天皇のころからの太陰暦によってきました。

暦というものは「宇宙と人間との共通点を探るため」に研究されてきたのです。

人間は、宇宙の大生命の一つの表れである、というのが仏教の原点です。

そして、人間がより幸せに生きるためには宇宙を知らなければならぬ、という考えから天文学を研究するようになったのです。だから、昔から僧侶の天文学者が多いのです。

そして、大自然の運行に合わせて干支九曜、七曜星、六曜、二十八宿、十二干などが作られたのです。これらによって吉凶を占い、それが今日の易占となつていくのです。

「そんなものは全て迷信」と一笑に付す人もいます。しかし、閏年は、子と辰と申の年にしかないことは、不思議なようですが、純然たる事象なのです。むかしから、五神が住むにふさわしい地といふのがあります。

水は東に流れ、南がひらけ、西が広く、北に山を背負って、中央が平坦になつていて地を最良とする、といわれています。都を京都においたのも、そんな理由だったのでしよう。

鬼門などというのも、北東や西南は、はじめにして風が通りにくく不衛生だから清潔にするために作られた天の道理なのです。

古くからあるものでも天地自然の道理にかなつていないものなら現代人もおおいに活用すべきでしょう。

「知足」（足るを知る）

「人は欲に目が無い」などとよく言います。本当に欲には限りのないもので、儲かれば儲かるほど欲の心が大きくなります。

ある人が、欲の深い人に

「そんなに儲けてどうするのかね。もうあなたの器には十分に儲けて得たものが満ちているから、これ以上得てもあふれるだけだろう。それなら、そのあふれた物をみんなに分けてあげてはどうかね。」

と注意したところ、欲深き人が答えて言うには「いや、その都度、器も大きいものに切り替えていくから一杯にはならないよ。」

これでは、欲望はいくら満たされても尽きることはないでしょう。しかし、足りるということを知らなければ、失うものもまた大きいのです。節角、器にものをためても結局は漏れるばかり、これを「有漏」と言います。

古い歌に、

「欲深き 人の心と降る雪は 積もるにつけて 道を失う」

とありますが、どんなに欲望が満たされても、道を失つたのでは何にもなりません。「道」とは人としての在るべきすがた、本来の生き方といってよいでしょう。この道はずれると、いつまでも安心を得ることができなくなるのです。

「足るを知るは、これ富楽安穩の法なり」とありますように「知足（足るを知る）」ことが人としての道を得るための要件でしょうね。

足ることを 知る心こそ宝船
物のかずかず 積みみせすとも

